リボルバー

御茶杉、モスクワ、８４

ここに銃がある。

銃というのは定義するならば円筒であり、鉄の塊であり、簡略化されたマークであり、鉄であり、鉄の塊であり、簡略化されたマークであり、鉄の中に具現する重さである。それは人を傷つけるものというメタメッセージを持っているが、それが必ずしも人を傷つけるわけではない、人を救うこともあるということもまた私達はそれはそれとして当然のことと考えることが出来る。具体的なイメージが浮かぶわけではないが。

そういうことを、銃なんぞを、今という時点ここという場で持ち出して何が言いたいかというと、特に何というわけでもない。いや、何も言いたくないということはない。そんなことはあり得ない。こうして語り出した時点で、その可能性は捨て去られた。無言すらも沈黙すらも何かを表すのだ、とまで言ってしまえばキリがないが、まあそこはそれとして良いだろう。そういうものだと言ってしまえば世界は回る。とりあえずはつつがなく。

私が何を言いたいのか？　実のところ、それは私自身にもよくわかっていない。君が好きに定義すれば良い。そうすれば私はそれに文句を言う。これでコミュニケーションはもう成り立つのだ、決して悪いことではあるまい、と。誰かが言った。誰かということにして私は君を煙に巻く。巻かれてくれ。巻かれてくれたら話を進めることにしよう。

そう、銃があったのだ。それは誰かを何かを傷つけたかもしれない狂わせたかもしれない。ありがちな表現だが言葉だがそういうことだ。誰にも影響を与えなかったのかもしれないが、それでは話が面白くない。物語に楽しみがない。

だから語って貰うとしよう。これは銃の物語。些

細な、重たい、一振りの銃の物語。ということは、その銃の持ち主たる人間の、またその人間の周りに偶々居あわせた人間の、物語だということだ。

そう語って蝶ネクタイをした銃は礼をした。語り終えて、と表現しても良いのだろうか。とりあえずの最初の台詞、設定された最初の場面は終えたのだろうから。何はともあれその時のわたしの感想は、巫山戯た奴だなあ、ということだった。

そして舞台は暗転した。ただ赤い蝶ネクタイだけがいつまでも暗闇に映っていた。ひょっとするとそれはわたしの瞼の裏に残った残像だったのかもしれないが。

わたしは目を閉じた。

赤い残像はしっこくまぶたにこびりついて、ゆっくりと漆黒に溶けていった。いつだったか、ずっと前に見た電球のフィラメントの残光がぷっつり消えてゆっくり暗くなっていくのに似ていた。

それから劇場からどうやって家まで帰ったのかあまり覚えていない。

明かりをつけずに部屋でぼんやりしていると、セックスドラッグロックンロールてき精神麻痺がもたらすマボロシのような心地よい違和感に襲われる。鯨の腹の中のピノキオの気分で、わたしは灰色の床に寝転んだ。床はひんやりして、とても気持ちよかった。わたしはまどろみを旅しながら、あの多弁な銃を思った。銃が多弁とは意外だった。蝶ネクタイも意外だった。

ここでひとつ、象徴的金言を。

暴力はつねに反・暴力として表される。すなわち他者の暴力への打ち返しとして」

サルトルは著書『弁証法的理性批判』でこういった。暴力はいつだって理由をもっているものだ。

遠くで銃声がした。
わたしは窓を開けて外の様子を見た。屋根裏の部屋からは町の様子がよく見える。早朝ということもあって、ほとんど人の姿は見えない。けれども、なにか様子がおかしいのは確かだった。肌着の老人があわてた様子で家に入っていった。
そのとき、電話が鳴った。
舞台、銃声、つぎは電話。
「まいったなあ」わたしはつぶやいた。そして手を伸ばして電話をとった。その拍子にタンクトップの肩紐がずれた。最近あらゆることがずれてばかりだ。
「もしもし」
「君の出番だ」
「あのおしゃべりで巫山戯た銃の声だった。
「わかってる」
わたしは自分の声が部屋中に響くのを感じた。コンピュータのデスクトップがちかちか光っていた。わかってる？　そうかわたしは、わかっていたんだ。
「だけどね」

わたしはつづける。なんの意味もないとわかっていながら。この灰色の部屋で惰眠をむさぼり続けたいというのが本当のところいちばんの願いなのだ。
「いったいあなたは誰に蝶ネクタイをつけられたの」
一瞬間を置いて、相手は答えた。
「わたしの蝶ネクタイは実際のところわたし自身がつけたのだよ。そして君の蝶ネクタイも君自身がつける。それが世の摂理」
もう世の摂理だのなんだの、摂理もなにもあったものじゃない存在に諭されるのもどうかと思ったが、わたしは行くしかないのだろう。しかたない。そういうときもある。それが世の摂理。
あの劇場でもらったパンフレット用の袋にはちゃんと蝶ネクタイとS&W社のロゴが入ったリボルバーが入っていた。どうりで重かったわけだ。わたしは蝶ネクタイをつけ、リボルバーを内ポケットにしまった。ちょっと迷ってから香水を空中に二プッシュだけしてくぐった。ナポリの夜。まるで夢をみているような気分だった。

そうしてわたしは風がふきすさぶ、暴力のにおいがする町へでていった。
太陽は未だ昇らず、町は鈍い藍色に染まっている。もしかすると銃声は太陽を餌食にしたか。それとも銃声を恐れて物陰に隠れているのか。なんにせよ、銃声だ。そのためにわたしは町へ出た。損な役回りだ。銃声は町に暴力をもたらしたか、誰かを傷つけたか。
「だとしたら」
だとしたらサルトル、その理由は？

わたしの足は迷わない。二本の足は進むべくして進み、曲がるべくして曲がる。不自然なほど静かな町をこつこつと進んでゆく。内ポケットの銃がひいやりと胸を冷やす。
わたしの目的地は明確か、わたしは何をしようとしているのか。それはわからない。

目の前に、古びたアパートが現れた。それは町にとけ込んで、見つからないよう息を潜めている。目を凝らせば、その小さな息づかいが感じられる。
「いかにも」
わたしはつぶやく。確かに銃声はここから聞こえたはずだ、と確信する。銃がポケットの中で震えた。ちがった。これは、わたしの震えか。
閉じられたドアに、ノックを一回、時間をおいて二回。三回目で開かれる。
「遅かったじゃないか、心配していたんだ」
わたしの知らない男が顔を覗かせる。
「いい蝶ネクタイだね」
「心配していたという割に、三回目だ。ごめんなさい、銃声がしたからね」
「銃声？」
男は無表情で、首を傾げる。
「銃声は未だしていない」
「でも」どういうことだろうか、やはり今日は何かおかしい。わたしはアパートの中に入り、男に食ってかかる。

わたしは銃声を聞いた」
そうだろうとも。何か飲むか？」
男はおどけた調子でリビングの椅子に座る。テーブルの上にはティーセット。角砂糖をもてあそんでいる。
「いらない」
歩いてきてのどが渇いていた。本当は欲しかったが、懐の銃がわたしを急かした。わたしは男を見つめている。男は角砂糖を口に放り込み、答える。
さあ、これが君の探す道だ」
男は片手を広げて床を指し示す。赤い、血だ。
血」
血は転々と、床に足跡を残している。
血は階段を昇っている。
あなたが撃ったの」
わたしは尋ねる。男は両手を広げ、わからないのジェスチャ。
あなたの銃声」
だって銃は君の内ポケットじゃないか」
その通りだ。銃を持っているのはわたし。この男は銃を持っていない。わたしは銃を取り出す。構えない。だらんとその重さに任せ、ぶら下げる。
じゃあ、あの銃はどこ」
あの、巫山戯た銃は、わたしを呼んだ銃は、どこか。わたしは尋ねる。
わからないのか」
男はわたしに尋ねた。質問に質問で返すなんて最低だ。しかしわたしは答えてやる。
わかってる」
そう、わたしはわかっている。
その通り。君が今、握っている」
わたしはうなずいたが、でもそれは違う。なぜなら、わたしの銃には蝶ネクタイが、赤い蝶ネクタイがついていないから。
銃声はいつ鳴るの」
いつの間にかわたしは銃を構えている。
それを僕に聞くのかい」
男は初めて、悲しそうな表情。
今だね」
ネクタイが曲がっているよ」

わたしは引き金を引く。
銃声。
わたしは男に背を向け、血をたどって階段を昇る。血は最上段で途切れている。階段の上には、暴力のにおいのするドア。そしてその脇には、固定電話。
わたしはひらめく。
舞台はまだ、終わっていなかった」
舞台、銃声、その次は。
わたしの目はじっと電話をとらえている。蝶ネクタイを締め直す。
りりり、と鳴り出すのを待って、電話を取った。
もしもし」

暴力が振るわれた」
その声は、酷く間近で聞こえた。ような気がした。
暴力は、振るわれた」
そうだね」
わたしは目を閉じ、そして見た。瞼の裏に赤い色が浮かび上がる。

暴力はつねに反・暴力として表される。すなわち他者の暴力への打ち返しとして」
わたしは歌うように言った。それとも歌ったのは銃だったのかもしれない。両方だったのかもしれない。
君は暴力を振るったね」
そう。わたしは暴力を振るった」
ならばその後には打ち返しがある」
わかってる。でも、それは世の摂理なの」
摂理だ。サルトルという名のある人間がある時点で偶々定めたものに過ぎなくとも、それは世の摂理なのだ」
くるくると回っていた赤い色が停止し、わたしに相対する。わたしはそれを見ている。恐らくかの銃はそれなりに美しく黒光りしているのだろうがあいにく暗闇の中それは見えない。それでもわたしは満足していた。赤が見えたから。
赤い蝶ネクタイの巫山戯た銃。血を浴びた銃。
その銃口が真っ向からわたしを見据える。
あと一つだけ聞きたい。わたしは暴力を振るわれ

たの？」
暴力は未だ振るわれていない。しかし振るわれている。わかっているだろう」
「そう。わかってるよ」
そしてまた銃声。
わたしはかろうじて瞼を押し上げることが出来たはずだった。
ぼやけた藍色の世界の中に、散った赤はひどく鮮やかだった。

わたしは目を開けた。
ぷつんぷつんと間抜けな音を立てて客席のライトが無秩序に点灯していく。呆然と視線を向かわせた先で、分厚い幕が舞台を閉ざしていた。その瞬間わたしはすべてを了解する。
わたしにはわかっている。そう、ずっとわかっていた。
そしてこれからもわたしはわかっているのだ。それがわたしの摂理。しかたない。
「あのう」
さて、あの灰色の部屋に帰らなければなるまいかと考えていると、声がかかった。少し離れたところで、掃除夫が困ったようにわたしを見ていた。わたしは吃驚して彼を見つめ返した。
「すみませんが、もう閉館なんです」
本当に申し訳なさそうに言う。つられてこちらまで謝りたくなるような態度だ。羨ましい。
わたしは立ち上がった。掃除夫は深々と頭を下げる。
その旋毛に向けて、わたしはつぶやいた。
「わたしは本当は、はっきりしない色が嫌いなんです。原色が好きなんです」
「は？」
掃除夫は顔を上げたのだろうが、わたしは振り返らずに歩き始めていた。本当は振り返りたかった。いや、振り返りたくなかったのか。
さて、これからどうなるのだろうとわたしは考える。パンという乾いた音は、リリリリという姦しい

音は鳴るのだろうか。わたしはそれを待つのだろうか。
わたしはきっとほとんど途方に暮れていたのだろう。
掃除夫の作業着の色は、まるで血を浴びたような鮮やかな青の色だったから。